

演出の記録「なんとかなる」2018 県大会より

2025 年 9 月21日 久保山ワタル

演劇の面白さは「演出を発見すること」にある。

・舞台セット

中央は高くして、三角形型の安定したセットを組む。両端をうまく使えるように上下(かみしも)を開いた。



・当てたい位置に TOP

部室内にベそちゃん(役名坂本)サスを作る。高校演劇は顔当てシーリングは、特定の位置にしかできないので、側面にしか光が当たっていない。それでもこの位置に TOP を取った。その対称の位置に、タンコちゃんサスを取る。



・時々、客席に向かって話す。

これは脚本に指定があるので演出ではない。しかし珍しがられた。小説のように、登場人物の心理がセリフとなる。登場人物を一種の狂言回しにする方法。



・椅子を持ち寄る。

グループでの会話を見やすくして、お客さんに役者を親しみを持ってもらうことを第一に考えた。



・ジェイミー・カラムのポスター

コンキチとヒロちゃんが、ロッカーを開けると、カラムの貼ったポスターが見える。地区大会では数枚だったが、県大会では数を増やした。

2007年「虹の向こうへ」でも映画のポスターを貼ったが、やはり数が多いほうが迫力があってよい。



・大きな動作を入れる

「中学の時は剣道部でした」というベそちゃんに、先輩二人が「わー、運動部出身!」と言いながらテニスのツインビーム(大昔の「テニスボーイ」という漫画の必殺技)をやって、タンコちゃんが、「それテニスやないか」って突っ込む。

やはり、意外な動き、特に回転運動が入ると面白い。またスカートなので、ひらひらする。ほかの二人の驚きの動作もよい。



・籠を揺らす

新入部員は自分の籠を選ぶことになるのだが、何色を選ぶかで、先輩たちが籠を揺らす。猫に餌をやるときのような。ミザンスもよく、面白いシーンになる。



・神棚と亀様が見ている前で籠が渡される。

何気ないが、演劇部にとって神聖なシーン。伏線でもある。センターの亀が見守る位置で授与される。先輩たちは立ち合い人として上手に。授与されるベそちゃんの受け取り方も大切。この劇では「神」を意識する場所が多い。ベそちゃん頻繁に祈るし。

新海誠の「君の名は。」「天気の子」「すずめの戸締り」の3本の映画には、必ず神社、巫女、鳥居など、神様系モチーフが出てくる。全国大会2022年最優秀賞「きょうは塾に行くふりをして」も神社が出てくる。亀様、そして「部室」がもう一人の登場人物と気づかされる。



・部室の枠を無視して逃げるベそちゃんと、それを追いかけるカラム

教室に駆け込むカラムがセンターを取ってセリフを言った後、ベそちゃんがいつの間にか枠外まで逃げている。それをカラムが追いかける。とても躍動感のある面白いシーンになる。



- ・お菓子を投げつける

乱暴なシーンだが、お菓子の音とみんなの反応が面白い。許されるか許されないか微妙だが、やっちまったっていう感じ。カランの気持ちや性格などがよくわかる。



- ・メガホンで一撃

県大会で取り込んだ演出だが、女の子を殴るので微妙だった。けど、カラン(大田)が派手なポーズを決めてくれたおかげでバランスが取れ、思わず吹き出すようなシーンになった。

あと2か所殴るところがあるが、それはやりすぎた。ここだけにしとけばよかった。

- ・黒パネルを利用して教室セット



うまく稼働パネル4

枚で作れたと思うが、後ろのセットが見えているのは、シーリングが強すぎた。照明はTOPとSSのみにすればよかった。



- ・「お先に」「お疲れ」ポーズ

演劇部内の話なので、この架空の演劇部のみで通用するポーズを入れた。くると手をまわす動作が気持ちいい。ほかにも「うし！」って、決めるところとか、ローカルルール(ポーズ)多用した。



- ・コンキチのパソコン

今演出するなら、パソコン画面に音響ソフトを立ち上げて作業しているような映像を入れたらいい。当時はそこまで思わなかった。そういう細かいところをしっかりやりたい。

- ・カランをベそちゃんが励ますシーン

やはり顔が見えないのが残念。そーっと下手のみ、シーリング入ればよかった。

場転に時間をかけすぎて、劇の流れを緩ませたりするなどの、演出上のミスが目立つ。もう少し「テンポ」の良さを重視した方がよい。



・ヒロちゃんセンターとる

中川君の話をするとき、ヒロちゃんがセンターを取り、他の4人がリアクションしなければならないが、下手の二人のリアクションが弱い。上手の二人はちゃんとしている。



・ミザンス重視の人物配置

アニメやドラマの影響かどうか、生徒が演出すると、距離が近づきすぎる気がする。相手の目の前で言いあったりとか。(NHKのドラマでも見るが)でもこのくらい離れていたほうがいいと思う。



・光るパネルで「銀河鉄道の夜」

地区大会は後ろの装置が見えていたので、県大会ではSSを多用し、後ろを目立たなくした。

それでもまだ後ろが見えている。もっとSSのみにして、前明かりを極力絞るべきだ。(後で後ろがほぼ真っ暗にできている部分もあった)

パネルの横幅は91cm。本当は120cmくらいで作ればよかった。ベニヤのサイズに合わせてしまったのは手抜きだったか。

・色について

パネルの光も白、生徒の服装も基本白か黒なので、色にメリハリがない。ベそちゃんの服のどこかに赤いアクセサリを付けるとか、タンコちゃんとカランの帽子をもう少し鮮やかにした方がよいだろう。全体に「銀河鉄道の夜」の演出をもっとしっかり考えるべきだったか。

・扉の音

扉のガラガラと開く音を全部付けた。審査員からはいらないと言われた。自分たちの信じた通りやり切ったが、どうだったのだろうか。ここのシーンはガラガラ音でベそちゃんが振り向くので、やっぱりあってよかったか。



・新入生勧誘のシーン

三重県大会のHPにも使われたシーン。5人がミザンスよく、必死に1年生に呼びかける。

そのあと部員が一人も入らなくて、唯一の2年生のベそちゃんが落ち込むシーンは、パネルの陰で先輩たちが見守る演出を付けた。



・大会の劇が決まって、コンキチ先輩が流す音楽に乗ってダンス

ダンスしながら前に出てきて、一人台詞。セリフが始まったらほかの先輩で場転。次のシーンは廊下で、タンコ先輩とベそちゃんが出会い立ち話するシーンへスムーズにつながった。



・音楽を流しながらの先輩差し入れシーン
本当にいいシーンは無言である、の典型。



写真はこのあたりから地区大会のものになっています。床が白いのが地区大会、黒いのが県大会。

・劇中劇のダンス

パネルを点滅させ、カラフルなＴシャツを着て踊る。楽しいシーンになる。

地区大会では上手側の大田に光が当たっていなかったのが、県大会では思いっきり当たるように変更した。



・部屋の劇での窓の設定

部屋の劇では観客席側に窓やバルコニーを持ってきて、それを見ながら話をする、お客さんに顔がよく見えてよい。顔を正面から見ると、人はその登場人物に親近感を抱く。小津安二郎監督が映画で良く使った手。この劇も一番良いシーンにそれを持ってくる。



・先輩が卒業していった後の部室

悲しみと寂しさ、戻らない時への無常観を、「Living Naturally」の音楽の中で、ベそちゃんのふらふらした足どりで表現。照明が夕日が変わった。この後卒業おめでとうの看板をひっくり返すと、入学おめでとうになり、ベそちゃんが新入生の勧誘に出ていく。



・ベそちゃん、タンコ先輩の籠の「名前」を見る。

劇の最初の籠のシーンの伏線を回収する。このシーンも生徒が考えた。現場で考えた小技を積み重ねる重要さを感じる。「時は回る」という劇のテーマが浮かび上がる。

・ラストシーン～どこで幕を下ろすか

地区大会では、ベそちゃんが亀様に一礼して、去っていった瞬間に幕を下ろす。県大会では、礼をしたまま幕を下ろした。結果的には、去っていった瞬間に幕を下ろした方が勝った。



演劇って微妙だなものだな、と悟る。

